池上右平に関する史料の発見と考察

A STUDY ON A HISTORICAL DOCUMENT ABOUT UHEI IKEGAMI

正見 泰 — * 1

キーワード:

池上右平, 栗林家, 加賀八家作事方, 渡部家文書

Keywords:

Uhei IKEGAMI, Kuribayashi family, Construction division at the Kaga-hakka, The Watanabe family's documents

Hiroshi SHOKEN — * 1

I discovered a historical document related to Uhei IKEGAMI in “Kaga-Han Odaiku Watanabe-Ke Monjyo (The Watanabe family's documents)” The origin that the document was written is clear, and it is highly reliable by checking with the other historical documents. It is one of a few valuable historical documents pertaining to carpenters in the early period of Kaga-Han.

As for the time when Uhei IKEGAMI drew “Tenshu-Sashizu”, until now it had been supposed that it was before the end of Kanbun Era (1673), but this document indicates that it was possibly after the 4th year of Enpo (1676).

1. はじめに

池上右平は、内藤昌氏の安土城天守の復元に関する論文¹⁾中で、安土城に関わると見られる『天守指図』を透写した者として、紹介された人物である。

右平およびその養子先の池上家に関するこれまでの研究には、前述の内藤氏と、その内藤氏と『天守指図』および安土城天守の復元をめぐる討論を行った宮上茂隆氏の研究²⁾がある。その後、櫻井敏雄氏³⁾、河田克博氏など⁴⁾の研究も見られたが、宮上氏を含めいずれも内藤氏の研究から大きく踏み出すものではなかった。

そのため、今日まで右平およびその養子先の池上家を論じる場合、内藤氏の論文が引用され続けてきた。こうした状況の中で、拙稿^{a)}において、渡部家『累代系図』^{註1)}の記述等を検証し、右平の経歴に関する別見解を示したところである。

当稿では、先に発表した3つの拙稿^{a)}、^{b)}、^{c)}において、『累代系図』と並び検証の重要な史料となった栗林又七の『先祖并一門付之覚』の詳細を紹介するとともに、史料としての信頼性の検証および池上右平に関する考察を行った結果をまとめて報告する。

2. 新史料について

(1) 発見の経緯

「加賀藩御大工渡部家文書」(小松市文化財)の目録が山前圭佑氏らにより作成され、『加南地方史研究 第54号』に掲載された⁸⁾。この文書は文化財名称にあるとおり、加賀藩お抱え大工の家に伝わる史料であることから筆者の目の留まるところとなり、「池上右平」の名前の記載のある史料2点が含まれていることを発見した。その

うちの1つである『累代系図』については、北野勝次氏が「加賀藩御大工頭渡部家」において、その一部をすでに紹介していた⁹⁾。しかし、その稿において北野氏は右平には全く言及していなかった。

そして、もう1つの史料が、栗林又七の『先祖并一門付之覚』^{註2)}(以下、当史料と呼ぶ)である。当史料の史料名を記載した目録は公表されたものの、前出の北野、山前両氏をはじめ、未だどの研究者からも当史料を取り上げた研究等は発表されていない。

(2) 形状および記述内容

当史料は、幅24cmの切紙3枚を継いだ長さ94.5cmに及ぶ、表装のない切続紙である。次に、当史料の全文を翻刻して掲載する。

「先祖并一門付之覚

一祖父 栗林太右衛門

利家様御代被 召出、其後

利政様御賞被成御知行三百俵之所

致拝領御奉公仕候

一父 栗林仁左衛門

利常様江被 召出御切米五拾俵式人

扶持拝領仕申候

一私儀万治三年被 召出御切米五拾俵

拝領仕罷有申候

御扶持方大工

一せかれ 傳二郎

一同 吉三郎

一娘 式人

奥村伊豫守家礼

本稿は2009年度日本建築学会北陸支部大会で筆者が発表した「『御大工知行帳』の成立と信頼性に関する考察—加賀藩御大工栗林家の家系検証を中心に—」^{ほか}2編^{7), 5), 6)}の一部に、加筆・修正した内容を含んでいる。

^{*1} 石川県金沢城調査研究所 調査研究専門員・工修
(〒920-0918 金沢市尾山町10-5 石川県文教会館)

^{*1} Research Specialist, Ishikawa Prefectural Research Institute of Kanazawa Castle, M. Eng.

一弟 池上右平
御大工
一妹 黒田左助女
同
一甥 渡邊左兵衛
一同 池上勘右衛門
一同 池上新平
大工肝煎助衛門せかれ
一同 与八郎
一同 黒田左介せかれ
御扶持方大工
一姪 六兵衛女
一同 池上右平娘
大蔵大輔様罷在候
一従弟 清水新兵衛
同断
一同 青山左助
同断
一同 栗林弥平
江戸大工
一同 彦助
右先祖一門付如此御座候以上

延宝四年七月廿五日 栗林又七

一色瀬兵衛殿 』

当史料は、表題とA～Cの計4つの部分から構成される(写真1)。

A部分は、祖父太右衛門、実父仁左衛門、又七自身の簡単な経歴を記述した部分で、それぞれA1、A2、A3に細分できる。

まずA1部分は、又七の祖父の太右衛門に関する経歴を記述した部分であり、次のA2部分は実父の仁左衛門に関して記述した部分、最後のA3部分は又七自身に関して記述した部分となっている。

次のB部分は、栗林又七の親類を列举記載している部分である。

最後のC部分は奥書にあたり、作成した栗林又七の署名に続き、当史料を作成または提出した日付と、提出先の相手の名前が記述された部分である。

(3) 当史料の特長

◎特長1は、作成または提出した年月日を明記していることである。

C部分で、当史料が「延宝四年七月廿五日」に作成されたか、提出された文書であることが判るので、B部分に記述されている内容は、延宝4年(1676)7月25日頃のものであると考えられる。そこで、当史料の信頼性が確認されれば、右平が少なくとも延宝4年7月頃まで池上右平を名乗り続けていたと断定できることとなる。

◎特長2は、作成者・提出相手を明記していることである。

特長1と同じくC部分により、当史料は「栗林又七」が作成し、「一色瀬兵衛」に提出されたことが判る。この一色瀬兵衛は、『諸頭系譜』¹⁰⁾・『諸士系譜』¹¹⁾により、延宝4年当時、藩の作事奉行であったことが明らかになっており、時間的な事実と矛盾がないことが判る。すなわち、当史料は、御大工である栗林又七が、上司にあたる藩の作事奉行である一色瀬兵衛に提出した文書の控えであることが判明した。

3. 信頼性の検証

(1) 伝来の経緯

しかしなぜ、栗林又七の文書を渡部家が所蔵しているのか。栗林家や、提出先であった藩の作事奉行もしくは作事方の役所である作事所に伝来した史料であれば怪しむところはないが、同じ藩お抱え大工の家系ではあるが、他家に伝来したことには疑義が生じる。

このことについては、又七が江戸で重大事件を起こし、延宝7年に栗林家が断絶となったため、栗林家等の家伝の書が親類であった渡部家に移されたとする経緯が、『累代系図』に記述されている。すなわち、この時、渡部家に渡った栗林家の家伝の書の中に、当史料が含まれていたと考えられる¹²⁾。

なお、『累代系図』の記述の信頼性については、富山藩の史料である『侍帳』¹²⁾や『由緒書』¹³⁾の記述が、『累代系図』に記述された状況と合致しているかを考察するなどの方法により、すでに拙稿¹⁴⁾において検証し、信頼性が高いことを確認している。

(2) 『御大工知行帳』¹⁵⁾・『累代系図』との関係

『御大工知行帳』には、享保9年(1724)7月27日付けで「御作事奉行所江人々指出置候由緒書 / 其外覚書等を以段々僉儀仕」との記述がある。ここで言う「由緒書其外覚書等」こそが、当史料に類する由緒書等であったと考える。すなわち、当史料の作成目的は、藩

写真1 栗林又七の『先祖并一門付之覚』全文

のお抱え大工たちが先祖や自身の記録と親類を、藩の作事奉行に報告することになったと考えられ、度々提出されたものと思われる。

また、享保17年6月16日付けで、「右帳面（前述の享保9年時に編纂された知行帳）養父大西故平右衛門上置候得共、/紛失仕候由ニ而、私（大西久左衛門）方ニ相調置申分、今般指上 /置申候、以上」との記述が見られ、『御大工知行帳』が単に作事所で編纂されただけでなく、御大工頭が『御大工知行帳』の写しを保管していた状況が読み取れる^{注4)}。すなわち、御大工頭が、藩のお抱え大工たちを管理するために『御大工知行帳』の写しを利用していたと思われる^{注5)}。

次に、御大工1人当たりの『御大工知行帳』の記述量に着目すると、延宝4年の時点で生存していた御大工より急激に増加していることから、当史料のような延宝4年頃に提出された由緒書等が、現存する『御大工知行帳』の最初期の編纂に使われた根拠史料であったと考えられる⁷⁾。

また、前述したように『累代系図』は、同じ渡部家に伝来した文書であって、当史料よりも後の時代にも編纂され続けた史料である。したがって、渡部家がすでに所持していた当史料を参考にして、『累代系図』が記述されたことは想像に難くない。そこで、当史料と『御大工知行帳』および『累代系図』の記述を比較した。

まずA1部分の太右衛門に関する記述は、
「一祖父 栗林太右衛門
利家様御代 召し出だされ、その後、
利政様御貴い成らる知行三百俵の所
拝領致し、御奉公仕り候」と読み下せる。

この記述は、『累代系図』・『御大工知行帳』ともほぼ同様であるが、『御大工知行帳』では前田利政に仕えた年を慶長5年(1600)と明記している。しかし、慶長4年には利政に能登が分与されており、前田利家も亡くなっている。さらに慶長5年9月の関ヶ原の戦い後、利政は京都に隠棲していることから、『御大工知行帳』の「慶長5年」の記述の方が疑わしいと判断される。

続いてA2、A3部分を読み下すと、
「一父 栗林仁左衛門
利常様へ召し出だされ、御切米五十俵二人
扶持 拝領仕り申し候」
「一 私儀、万治三年(1660)召し出だされ、御切米五十俵
拝領仕り罷り有り申し候」となる。

仁左衛門に関しても、『累代系図』・『御大工知行帳』とはほぼ同様の記述であるが、『御大工知行帳』では切米高が60俵2人扶持となっている点が当史料とは異なっている。これは、字を写し間違えたと考えられる。

又七に関しては、『累代系図』には又七の名を見ることはできるが、藩のお抱えになった年・切米高ともに記述されていない。一方、『御大工知行帳』には当史料とはほぼ同様の記述がされている。

次にB部分に記載されている親類のほとんどは、『累代系図』にも同様に記載されている。しかし、江戸大工の彦助だけは当史料にしか見られず^{注6)}、具体的にどの家系に属した者かは分からない。当史料に記述されている彦助の位置から見て、大蔵大輔様の家来である清水新兵衛らの弟ではないかと推定される。

以上のように、『御大工知行帳』・『累代系図』と当史料の記述は多くの点で一致していることが判った。すなわち、『御大工知行帳』は、

予想されたように当史料の記述を基に編纂されている節が窺われ、『累代系図』の記述も当史料を参考に書かれたと思われる。

(3) 他の史料による検証

ところで、『御大工知行帳』を検証したところ、延宝4年以前に死亡しているほとんどの御大工の記述量は著しく少ない。また、病死と記録されている御大工中村九大夫に、事故死したとする別の史料が確認されたことから、藩や家にとって不都合な事実を伏せた可能性が窺われた⁷⁾。これらのことなどから、『御大工知行帳』の信頼性には一部に問題があることを指摘できる。前節で述べたように、当史料は『御大工知行帳』の基となったことが窺われたので、その信頼性を検証しておく必要があると考えられる。そこで、『御大工知行帳』・『累代系図』以外の史料により当史料の記述の検証を試みた。

まずB部分に着目した。大蔵大輔様の家来とされる清水新兵衛・青山左助・栗林弥平の3名は、加賀藩内の大工の家系の研究において、これまで全く知られていなかった人物である。一方、2代目富山藩主の前田正甫が、寛文9年から大蔵大輔を称していたことが判明し、当史料で言う「大蔵大輔様」は、前田正甫を指すと考えられた^{注7)}。そこで、富山藩の『侍帳』を検証すると、上記の清水新兵衛・青山左助が富山藩士であったことが、寛永16年(1639)の侍帳で直接確認できた^{注8)}。また、『侍帳』の元禄3年(1690)の侍帳に細工小頭「栗林儀平」の記載があることを確認し、検証の結果、弥平と儀平は同一人物と推察された^{注9)}。さらに、明治維新まで存続した青山左助家の子孫が、天保年間に富山藩に由緒書を提出しており、『由緒書』で確認したところ、先祖として栗林太右衛門の経歴も記述されていた⁸⁾。そして、その内容は、当史料のA1部分とは異なる記述も見られるが、大筋では同様の伝承であることが確認された^{注10)}。

これにより、当史料に記述された加賀藩の御大工家に関する事柄が、他藩の公式史料の記述とおおむね一致することが判明し、当史料のB部分およびA1部分の信頼性の高いことが確認された。

最後のC部分では、前述したように、当史料の最重要な情報である作成または提出年月日、作成者の「栗林又七」、提出先の「一色瀬兵衛」名が記述されている。このC部分の信頼性については、前述した『諸頭系譜』・『諸士系譜』によって、一色瀬兵衛が延宝4年当時に藩の作事奉行であったと確認したことで、担保されたと考える。

比較すべき他の史料が『御大工知行帳』・『累代系図』以外に存在しなかったA2およびA3部分を除けば、他の史料との比較によって、当史料の記述内容の多くの部分に関して信頼できることが確認された。したがって、A2およびA3部分を含め当史料全体の信頼性は高いと考えられる。

4. おわりに一新知見と今後の展開一

これまで述べてきたように、当史料は、作成目的・来歴ともはつきりしており、記述内容の信頼性も高いと考えられた。その結果、前述した当史料の特長によって、当史料が作成または提出された延宝4年当時、右平はまだ池上右平を名乗っていたと判断される。

これまで池上右平の改名時期については、「寛文六年をそう遠くへだたる時期とは思えない」とし、池上姓で署名された『天守指図』を右平が透写した時期は「寛文末年頃」^{注11)}、と前出の内藤氏により考定され¹⁾通用していた。しかし、当史料の発見によって、少なくとも延宝4年7月頃までは池上右平を名乗っており、その改名時期

は延宝4年以降であったことが初めて確認された。これにより、右平が『天守指図』を描いた時期は、これまでの通説とは異なっていた可能性がでてきた^{注12)}。

以上のように、作成または提出した年代が明記されており、作者の栗林又七が池上右平の実兄であったことから、当史料により、延宝年間に入ってから池上右平と名乗り続けていたことを明らかにすることができた。さらに当史料は、栗林家だけに留まらず、渡部家、黒田家と言った初・前期の加賀藩お抱え大工の動向・婚姻関係等を知ることができる、数少ない当時の貴重な史料であると言える。

なお今後は、当稿では明らかにできなかった江戸大工の彦助についての調査を継続し、その家系を確定するとともに池上右平らとの関係を明らかにしたい。また、今回の右平の経歴の更正により、『天守指図』の描かれた時期についても修正が必要となったと考える。

さらに、延宝期の御大工の由緒書の存在が確認されたことから、他の御大工家が作成した延宝期の由緒書等の発見にも努めたい。

謝辞

当史料の所有者および、写真1のご提供と翻刻に関してのご教示をいただきました木越隆三氏、翻刻に関して貴重なご教示いただきました石野友康氏に深く感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 内藤 昌：安土城の研究(上)・(下)，國華，第987-988号，1975
内藤 昌：復元 安土城，講談社，学術文庫版 2006
- 2) 宮上 茂隆：安土城天主の復原とその史料に就いて(上)・(下)，國華，第998-999号，1976
- 3) 櫻井敏雄，松岡利郎：加賀藩大工と古絵図，石川県の近世寺建築，石川県教育委員会，pp. 218-274，1980. 3
- 4) 河田克博，渡辺勝彦，内藤昌：加賀建仁寺流系本の成立，日本建築学会計画系論文報告集，第386号，pp. 109-119，1988. 4
田中 徳英：加賀藩大工の研究－建築の技術と文化－，桂書房，2008 など
- 5) 正見 泰：奥村家(嫡流)作事方の池上家について－加賀八家の作事方に関する研究－，日本建築学会北陸支部研究報告集，第52号，pp. 443-446，2009. 7【拙稿 a とする】
- 6) 正見 泰：富山藩における栗林家の家系に関する考察－加賀藩御大工栗林家の研究－，日本建築学会北陸支部研究報告集，第52号，pp. 439-442，2009. 7【拙稿 b とする】
- 7) 正見 泰：『御大工知行帳』の成立と信頼性に関する考察－加賀藩御大工栗林家の家系検証を中心に－，日本建築学会北陸支部研究報告集，第52号，pp. 435-438，2009. 7【拙稿 c とする】
- 8) 山前 圭佑：加賀藩御大工頭渡部家の文書から，加南地方史研究，第54号，pp. 1-11，2007. 3
- 9) 北野 勝次：加賀藩御大工頭渡部家，加南地方史研究，第51号，pp. 1-6，2004. 3
- 10) 木村 信伊：諸頭系譜（金沢市立玉川図書館蔵），1809
- 11) 津田 信成：諸士系譜（加越能文庫（金沢市立玉川図書館蔵）所収），1832
- 12) 高瀬 保 編：富山藩侍帳，桂書房，1987【『侍帳』とする】
- 13) 新田二郎 編：富山藩士由緒書，桂書房，1988【『由緒書』とする】
- 14) 日置 謙 編：改訂増補 加能郷土辞彙，北国新聞社，復刻版 1973

注

- 注1) 『累代系図』は、加賀藩御大工を代々勤め、御大工頭を2名輩出した渡部家の由緒書で、16世紀の元祖の渡邊監物から始まり、明治以降も記録が続けられた。各代の事跡・親類が詳細に記載されている。

- 注2) 目録では、I の番号6『先祖 一門付之覚 栗林又七→一色瀬兵衛』としているが、当稿では史料名に表題を採用した。

- 注3) 『御大工知行帳』は、前田利家の代から文政9年(1826)に召し抱えられた御大工等の名・俸禄・主な事績等を書き上げた清水文庫（金沢市立玉川図書館蔵）所収の史料であり、加賀藩のお抱え大工の研究には欠かせない史料として重用されてきた。詳しくは参考文献7)を参照

なお、引用文中の「/」は原文の改行位置を示す。以下同じ。

- 注4) 加賀藩のお抱え大工には、下から御扶持方大工、御大工、御大工頭の基本的な3階層が存在する。御大工頭は、藩内の大工の最高職となる。ことわりがない限り、当稿中の御大工や御大工頭等は、加賀藩のお抱え大工の階層名を指す。なお、引用文等中の()内は、筆者が加筆した。

- 注5) 大西平右衛門とは、宝永5年(1708)に安田八郎右衛門と並んで最初の御大工頭になった藩のお抱え大工である。享保17年に、この文を書いた平右衛門の養子大西久左衛門は、享保12年に御大工頭に昇進している。この後、寛政3年(1791)に、藩に再々度の『御大工知行帳』の写しを差し出した御大工頭が清水治左衛門と清水多四郎軌亮の両名であった。こうした状況から、清水多四郎軌亮の子孫（清水又十郎家）に『御大工知行帳』が伝来したと推察する。

- 注6) 大工肝煎助衛門の倅の「与八郎」は、『累代系図』の「山本與八郎」と同一人物と考える。なお、拙稿 b⁹⁾では右平の倅の新平も当史料だけに記載があるとしたが、新平は『累代系図』にも記載されている。

- 注7) 参考文献14)によれば、2代目富山藩主の前田正甫(まさとし)は、寛文7年(1667)にほんの一時期大蔵大輔を称したようだが、改めて寛文9年から大蔵大輔を称するようになったとしている。このことから、寛文9年に正式に大蔵大輔に叙任したと思われる。

- 注8) 富山藩士と判明した3人は、又七の父である栗林仁左衛門の兄弟にあたる清水(栗林)太右衛門 光則の子息であり、兄弟同士であったことを拙稿 b で推定した。清水新兵衛と青山左助は富山藩立藩時に加賀藩から移ったと見られるが、栗林弥平だけは立藩時に年齢が若く富山藩士ではなかった可能性が残る。さらに、富山藩士小川孫太夫の由緒書から、左助に青山平助と言う弟が居たことが判明した。この平助が、当史料中の江戸大工の彦助であった可能性を拙稿 b で指摘した。

なお、又七の祖父は栗林(清水)太右衛門 忠光であって、加賀藩内に清水(栗林)太右衛門と名乗った同名の子(光則)がいたことが、富山藩側の史料に記載されていた。そこで調査したところ、石川県内に光則によると見られる作品が遺っていたことも、拙稿 b で初めて明らかにした。

- 注9) 拙稿 b において、寛永16年と貞享3年(1686)の侍帳には栗林を苗字とする藩士は確認できなかったが、元禄3年の侍帳で儀平の年齢が62才と高齢であるとしていることと、「弥」と「儀」の崩し字が似ていることから、『侍帳』の読み違い等を推測し、弥平と儀平を同一人物と判断した。

なお、寛永16年の侍帳に弥平が見られないのは若年であったためで、貞享3年の侍帳に見られないのは、前述した延宝7年の栗林又七の事件による処分⁹⁾が実施されたからだと考えている。

- 注10) 太右衛門忠光の知行高を400石とすることが相異していた。さらに当史料にはない、利政改易後伏見に一時移住し、その後金沢に戻って清水に苗字を改めたとする伝承をもつ。

- 注11) 寛文6年は1666年、寛文末は1673年である。寛文末は寛文13年で9月に延宝元年と改元された。

池上右平は、ある時期に萩原新左衛門に改名したとされ、別の姓名を名乗っていたとしても、最終的には、元禄5年までには、萩原に苗字を改めたとされる。なお、明治元年に13代当主池上鉄蔵が記した由緒書(加越能文庫所収)では、改名後の苗字を「萩原」と明記している。これまで、「萩原」とされたのは、写し間違いや読み誤りの可能性がある。

- 注12) 拙稿 a⁵⁾では、『累代系図』の検証から、右平が名乗りを変えた時期は延宝7年よりもさらに降るとし、右平の改名の理由についても別見解を論述した。これにより、これまで通用していた右平の経歴だけでなく、『天守指図』の作製経緯についても、再検討の必要性を示唆した。

【2009年10月20日原稿受理 2009年12月4日採用決定】